資料１

第３回学校地域協働部会 意見発表資料　　平成２７年７月２日

世田谷区立塚戸小学校
校 長　　永 山 満 義

今後の学校支援地域本部の役割や機能

１　学校における安全教育がなぜ必要か

⑴ 子どもの周りは危険がいっぱい

本校はこの１０年間に児童数が急激に増え、今年度は１０８０人に達した。副校長も養護教諭も２人体制ではあるが、毎日のように起こるけがや病気の対応に、担任とともに日々追われているのが現実である。さらに子どもたちは、学校外でも豪雨や地震などの自然災害、交通事故、誘拐連れ去り事件、スマートフォンによるトラブルや犯罪、薬物乱用等、自然や社会の中で生じる様々な危険の中で生活している。

学校から事故がなくなればどんなにすばらしいことであろう。子どもからあらゆる危険が排除されたらどんなに安心であろう。本来、“学校事故ゼロ”というのが理想の姿である。しかし、現実には毎日のように何かが起きている。　休み時間直後の保健室は、けがをしたり不調を訴えたりする子どもたちで賑わっている。エネルギーがあり余っている子どもたちが生活する学校現場では、それがむしろ当然であるといえる。したがって、教師は「事故の可能性は常にある」「危険はどこにも潜んでいる」ということを肝に銘じ、安全教育と事故防止対策を心がけていく必要がある。

⑵ 危険を予測できる子どもを育てる

事故は完全に防ぐことはできない。しかし、減らすことはできる。そのためには、危険を予測することが大切である。なぜなら、危険は予測しないと回避できないからである。たとえば廊下を走っていた子どもが、曲がり角で他の子どもと衝突するというのはよくある事故だが、それは曲がり角での危険を予測していなかったために起きる。だから危険予測能力は事故防止には絶対欠かせない。そして、教師自身も子どもたちの周りに潜む危険を予測し、それを事前に取り除かなければならない。それが危機管理の第一歩である。

⑶ 自分の命は自分で守る

学校は勉強をするところである。友達と切磋琢磨しながら、豊かな心や人間関係を育てるところである。しかし、「健康・安全なくして教育なし」という言葉にもあるように、教育の目的を達成するためには「子どもの安全や命を守る」という大前提を忘れてはならない。子どもたちを取り巻く危険は、学校外にもたくさんある。学校の門を出た瞬間から、交通事故や誘拐等の危険性が子どもたちを取り囲む。遊びに出かけるたり、塾や習い事に通う場合も同じである。しかも、そこには子どもを守るべき大人がそばにいない。だから、自分自身で判断して危険から身を守らなければならない。子どもの安全を守るためには、保護者はもちろん地域全体で子どもたちを身守る体制が必要である。それはまた、学校と地域との連携をさらに深め、地域全体の活性化にもつながっていく。

２ 学校における安全教育の範囲

⑴ 生活安全

・登下校の安全（登下校時に遭遇する犯罪や危険、痴漢・スリ、防犯ブザーの使用等）
・校内での安全（校内で起こる事故等の危険、遊具・道具・施設の安全。不審者等）
・家庭生活での安全（家庭で起こる事故等の危険。留守番、エレベーター、携帯電話等）

は・さ・み　→　は（はいる前は周りをよく見る）
さ（さっと乗ってボタンの前）
み（みんなで乗ろうエレベーター）

・地域や社会生活での安全（不振者。犯罪防止、子ども１１０番、夜間の外出等）

い・か・の・お・す・し

いか（ついていかない）
の（車にのらない）
お（おお声をだす）
す（すぐにげる）
し（しらせる）

⑵ 交通安全

①道路の歩行と横断及び交通機関の利用（交通法規、安全な歩行、踏切、マナー等）
②自転車の安全な利用と点検・整備（自転車の安全な利用、加害事故、交通法規等）

ぶ・た・は・しゃ・べ・る

ぶ（ブレーキ）
た（タイヤ）
しゃ（車体）
べる（ベル）

③二輪車・自動車の特性と心得
④交通事故防止と安全な生活

⑶ 災害安全

①火災時の安全（避難訓練、火災の原因、初期消火等）

お・か・し・も　お（おさない）
か（かけない）
し（しゃべらない）
も（もどらない）

②地震災害時の安全（緊急地震速報、地震発生時の危険、家庭での地震）

「落ちてこない、倒れてこない、移動してこない」

③火山災害時の安全
④気象災害時の安全
⑤原子力災害時の安全
⑥避難所の役割と貢献
⑦災害への備えと安全な生活

３ 安全教育と地域とのかかわり（２例）

⑴ 避難所運営訓練

学校、ＰＴＡ、行政、町会、消防署等の合同訓練。学校が避難所になった場合を想定し、炊き出し訓練、仮設トイレ設営、防災倉庫点検、救助法などの実地訓練を行う。地域の防災に対する意識を高める効果があり、地域活性化を図る大きな役割を担っている。参加者の高年齢化が進み、実際に避難所になった場合、どこまで機能するかが課題である。

⑵サバイバルキャンプ

学校、ＰＴＡ、おやじの会、行政、町会、消防署等が主催する小学生４～６年を対象とした１泊２日の宿泊訓練。避難所運営訓練の子ども版ともいえる。地震防災の基本学習、止血法、ロープの結び方、簡易担架の作成、消防署への通報訓練、仮設トイレの機能、消火訓練、バケツリレー、体育館での宿泊等、盛りだくさんの訓練を行う。「自分の命は自分で守る」という学校の安全教育のねらいに即しているとともに、地域の防災に対する意識を高める効果もある。中学生ボランティアも参加し、小中連携の一助ともなっている。

⑶ＰＴＡの校外担当による活動

ＰＴＡの役職の一つ。児童の安全に関する活動を行う。集団登校、集団下校、引取訓練、校外パトロール、避難所運営訓練、サバイバルキャンプ等に参加、協力をする。行政や町会等の関係諸団体とのパイプ役的な機能もある。学校と地域を結ぶ大切な役目をもつ。

⑷ＴＡＰ（塚戸安全パトロール）の活動

①構成員‥‥‥地域の方。保護者。卒業生。自発的な地域ボランティアの方々。

②組織‥‥‥‥現在約９０名。誰でも入れる。会長等の役職は一切ない。

③運営費‥‥‥会費は一切なし。区の「地域のきずな助成金」を申請し、ジャンパーを購入したりパンフレットを作成したりしている。

④活動内容‥‥・青いジャンパーを着て、登下校時などに子どもたちを身守る。
・学校行事など、できることを手伝う。その他いろいろ。

⑤モットー‥‥「できるときに」「できることを」「できる範囲で」

⑥成果‥‥‥‥・子どもたちとあいさつを交わすことで、メンバーの方々が元気になる。
・青いジャンパーを着ることで、地域の方々ともあいさつが交わされる。
・子どもたちにとって安心できる存在であり、心の支えとなっている。
・学校のさまざまな活動に対しての応援団ともなっている。
・学校運営委員会や学校関係者委員会、校長、副校長、生活指導主任もメンバーなので、地域の一体感があり、学校運営がとてもやりやすい。
・ＴＡＰのメンバーが、さらに他の地域諸団体に所属して、自らの活動を広げていくこともあり、地域の活性化に直結している。

４ 学校現場としての学校支援地域本部への期待

⑴ 全校コミュニティースクールをめざして

学校運営協議会が中心となり、学校支援体制を組織していく。ただし、既存の組織がある程度機能している場合は、それを活かした再編成が望ましい。また、地域によっては行政の区割りと学区域、町会組織が複雑に絡み合っていることもあるので、工夫が必要である。組織はシンプルなほど動きやすい。

全校がコミュニティースクールになることで、小中連携グループへと発展していける。その際、学校運営協議会同士の連携も必要となってくるが、その場合でも組織はできるだけシンプルで分かりやすいものがよい。

⑵ 学校が抱える課題解決や支援のための応援団的存在

学校が抱える課題は膨大である。しかも、教職員は朝７時前から夜９時過ぎまで仕事をしていることが多い。そのような状況で、本来の教育活動のほか、会議、出張、保護者対応、特別支援児童への配慮など、職務内容は大変多忙である。いい教育を行うためには、教職員の心身の健康が絶対的条件となる。また、子どもたちや保護者も多くの課題を抱えており、その影響が学校で現れる。これらの課題を学校と一体となって支援していくシステムが必要である。

⑶ 学校支援地域本部の組織づくりと人選

地域連携がうまくいっているところと、そうでないところでは、大きな違いがある。

うまくいっている要因は「人選」である。学校長がどう人選するかにかかっているといっても過言ではない。コーディネーターの力量にも大きな差があり、場合によってはかえって混乱を招くこともある。

先にも述べたように、組織はできる限りシンプルにすることである。組織が複雑で、役割分担が明確でない場合、かえって学校現場（特に副校長や担当教員）が連絡調整をすることになり、負担が大きくなるし非効率的である。地域も人たちも、自分の置かれている立場が分かりづらい。

⑷ 地域に存在する教育力の発掘と教育データベース管理調整としての役割

かつて「人材バンク」と称して、地域の協力者リストをつくり、学校の教育力への活用を図る学校が多かった。それによって学校の教育力が向上した一面もあったが、協力者への活用率に差が出たり、うまく活用が図られなかったりすることもあった。せっかくリストに載ったのに声がかからないという不満も、協力者から出てくる場合もあった。それには様々な理由があるが、連絡調整がうまくはたらなかったというのも原因の一つである。

学級担任としては、地域の人材を授業の中に大いに活用したいと思っている。しかし、そのためには打合せを綿密に行わなければならない。授業の進度や学校行事との兼ね合いも必要だし、ゲストティーチャーを迎えるための準備もある。終了後には、お礼をしたり手紙を書いたりする。結局、時間もかかるし大変だということになってしまう。その一連の事務的な仕事の一部分でも、学校支援地域本部の役割の中に組み入れることができれば、担任としてはどれほど助かるか分からない。